

教育現場から見える 平和／人権

教育講演会第2部 報告

虚偽・付度・改ざん・隠ぺい…おどろおどろしい言葉が、平然と毎日のニュースに載るこの頃、しかもそれが国の中枢での出来事であるだけに、18歳選挙権とは、こうした「どうしようもない世界」に若者をつき合わせることであったのかと、大人として恥ずかしく思ってしまう。だけど、何より怖いのは、こうした「開いた口がふさがらない」状況が続くと、悲しいかな、自分たちの中でこうしたことが慣れっこになって、怒りもだんだん感じなくなってくることだ。怒りがあきれ顔に変わり、果ては冷ややかに、しょうがないとあきらめる。こうなると、国の中枢で起こっているのが、民主主義に関わろうが、シビリアンコントロールに関係しているのが、自分とは関係ない出来事のように感じてしまう。「常識」と思われていたルールや価値観が、なし崩しに大きく変わってしまうことになるのだろう。そうなると、教科としてはじまった道徳で、「大人はこの限りではありませんよ…」と、平気な顔をして子どもたちに教えていたりするようなことになるのかもしれない。

憲法と教育……、この難しいテーマを今年の教育講演会で取り上げたのは、こうした「常識」の変更が、学校現場でも知らず知らずに進んでいることを見つめてみたかったからである。付度や隠ぺいは、何も国会だけではなく、教育現場もしっかりと侵食されているのではないだろうか。

憲法を憲法学者の立場からではなく、教育の視点と重ねるとき、そこにはどのような「事実」や「現実」が広がっているのだろうか。政治的な声を上げるためでもなく、大上段に憲法問題を振りかざすのでもなく、まずは自分たちの目で、やはり確かめなければいけない……。2月に行われた教育講演会の第2部では、学校現場の先生方から、平和、国民主権、基本的人権に絡む現状が提起された。紙面の都合で、ここではその一部をご紹介します。

〈平和・・・平和教育〉

●「平和主義」を学ぶために、平和教育という枠組みが作られ、学校現場では実践が積み重ねられてきました。特に大和市の中学校の典型的な例では、修学旅行で広島を訪れるという取り組みがありました。この実践では、事前学習として子どもたちが戦争体験者の話を聞いたり、地域の戦時中の様子を調べたりと、身近なところを出発点として、戦争が引き起こした様々な出来事を学びます。そして、修学旅行では、原爆ドームや資料館を見学します。そこには、戦争がもたらす悲惨な出来事が圧倒的な数で並んでいて、子どもたちは、それに強い衝撃を受けます。そして、たどり着くのが、その悲惨さを生みだした戦争を回避しようとする意思なのです。

しかし残念ながら、広島へ出かける学校はなくなりました。戦争への危機感が薄れ、平和教育を行うことの意味を失いつつあるのかもしれない。

もう一つ考えることがあります。それは、今までの平和教育の中心が、原爆もそうですが、被害者としての苦しみやつらさに共感するものであったということです。そこには教えづらい加害の側面を避けようとする意識があったのかもしれませんが、今後ますます、加害の側面に触れることは難しくなるのではないのでしょうか。

今後は、学校や日本という枠組みだけではなく、現在世界で起きている対立や紛争に目を向けさせ、環境や人権の問題として考えてみる機会を増やすことが必要だと思います。

(中学校教員 男性)

●6年生を担当した時に、ゲストティーチャーとして地域の戦争体験者を招いて戦時中の話を語っていただいた。子どもたちはお話を聞いて大変驚いている様子でした。今のあたりまえの生活が、戦争を放棄したその時から始まったことを知り、平和の大切さを感じた様子で

した。戦争を直接知る人が少なくなり、体験の継承が本当に難しくなっています。

国語の教科書にある「ちいちゃんのかげおくり」という戦争にかかわる教材を扱う前に学年の職員で打ち合わせをしていた時、ある先生からは、「戦争のことだから、あんまり深入りせずにと進めていきましょう」、「偏った発言と取られて、保護者から何か言われてもいけないから」という意見がありました。私は違和感を覚えました。過度に気を使って教えるにいく状況になってしまっているのはなぜだろうとも考えました。

平和を考えること、教えることのハードルを下げて、もっと身近なものとして捉えていくような動きができないかと思っています。
(小学校教員 女性)

●大学で教えていて感じてきたことは、思ったより日本の平和教育の層は分厚くて、静かな学生であっても、ちょっと聞いてみると私の想像以上にいろいろなことを知っているということです。それは学校で習った、学校を通じてであるということに感銘を受けてきましたが、ここ数年は、明らかに学んできていることが少なくなってきたと感じています。もし、学校でそういうことがなくなったとき、どこでそういう話は伝えていけるのでしょうか。今、先生方のお話を聞いていて、非常に強い危機感を覚えます。



また、世界で起きている現在進行形の話を取り上げることは、平和を考える上で不可欠なことであると思います。
(講師 青井未帆先生)

〈基本的人権〉

●過去に出会った子どもの事例です。ギリギリのところまで学校に来ている母子家庭の A さんのおうちでは、お母さんが工場の夜勤で働いて一家を支えています。お母さんが働いて家に戻ってきたころ、子どもたちは学校に行き、子どもたちが学校から帰ってくる前くらいに、お母さんは夜のご飯の準備をして、家を出ていくという感じです。子どもは、サイズが合わない大きなものや、ぼつぼつのものを着ていたり、上履きもサイズが合っていません。歯は虫歯だらけで、年中鼻水もたらしています。インフルエンザでも医者に行くことはありません。家に大人がいないので、言葉も少なく、文字の習得や思考にも大変時間がかかります。

こんな家庭を見ていて思うことは、まず大人や家族が支えられる社会でなければならないことです。確かに昨今では、親が加害者になるような悲しい事件も耳にします。子どもの人権は、親と切り離れたところで保証されなければなりません。しかし、そうであっても、子どもの人権を守るため、親の人権もまた守られなければならないと考えるようになりました。

もう一つ思うことは、子どもたちに生きていく力となる学力をつけてあげることだと思います。憲法だって、子どもにわかる言葉で伝えてあげたい。知ること、言葉を持つことからしか、声は上げられないのですから。
(小学校教員 女性)

6～8月のEd.ベンチャーの学習会

理論学習会 ●7月2日(月)授業検討会「子どもが考える授業づくり」:参考文献『先生、貧困ってなんですか?日本の貧困問題レクチャーブック』自立生活サポートセンター

授業研究会〈労働教育〉 ●6月14日(木)●7月12日(木)授業実践のための指導案検討会

ママパパのための学習会 ●6月16日(土)講演会「特別支援教育の基礎・育休からの復帰に向けて」講師:北島亜紀子氏(大和小学校教諭) ●7月21日(土)文献購読会:高橋勝 著『子どもが生きられる空間』・育児中の制度

外国人の子ども理解のための学習会 ●8月6日(月)～7日(火)集中講座全9コマ

特別支援教育のための学習会 ●6月22日(金)講演会「障がい者と雇用」講師:大山隆久氏(日本理化学工業株式会社)

【理事のつぶやき】ワークライフバランスを週単位で考えて、月から金までに仕事を終わらせて、土日は日一杯楽しもうと意気込んで週末を迎えても、その時にはもう意欲がなくなって、寝たり、だらだら時間を過ごしたりして終わってしまいます。それでは一日単位でバランスを取ろうと方針を変えてみても、出来ない日々が続いて、だんだん気持ちが萎えてきます。いつからこんな日々が続いているんですかね。きっと自分は楽しくなさそうな、辛そうな顔を隠しきれずに、子どもに対しているんだろうと思います。こんな大変そうな大人になろうとは、子どもは思いませんよね。子どもは大人の背を見て育つ・・・自分はどんな姿を見せているのですかね。仕事も大切だけれど、楽しく生きている姿を見せられたらいいのにね。(MM)